

放送人の会

No.59

2013.1.18

〒102-0094 千代田区紀尾井町1-1 千代田放送会館 3階

Tel&fax03-3221-0019 Mail info@hosojin.com

代表幹事 今野 勉

編集担当 伊藤雅浩 (広報委員長・編集長)、鈴木典之、前川英樹 (HP担当)、松尾羊一 事務局 須斎恵美子

2013 正月三題噺

代表幹事

今野 勉

―法人化・南方週末・毎日芸術賞

○法人化

明けましておめでとうございます。19日に法人化を議題とする臨時総会が開かれますが、この稿はその結果を待たずに書いております。会員の皆さんの御手許には法人になったときの定款が届いていると思います。が「幹事」が「理事」になっていたり物事の決め方がやたらに厳密になっていたり、とても窮屈そうに見えますが、それを受け容れることで得られる財務上の有利さや社会的活動の中の広がりなど、今よりももっと自由闊達に動けるのではないかと、私個人は期待しております。放送人の会の第2の出版にしたいと考えているところです。

○南方週末

ことしの日韓中テレビ制作者フォーラムは中国で開催されます。その中国から正月早々言論の自由をめぐる事件のニュースが飛び込んできました。

広東省の「南方週末」紙の新年号の記事が省共産党宣伝部の介入で改ざんされたことに対し同紙の記者たちがストライキに入った、というものです。中国の憲法は言論の自由を認めている、それに沿った法治を、

と主張した記事が、ほとんど正反對の趣旨に改ざんされ刊行されたようです。

ストに呼応して市民が集会を開き、人気ブロガーは記者たちを激励し、それに対抗する党宣伝部の通達「事件に関する意見をネットで転送したら厳しく処分する」が、そのままネットで流され、中国版ツイッター「微博」でも反発が広がっていきました。危機感を抱いた党中央は党機関紙系の新聞に「中国でこんなことをすれば、絶対に（政府に）負ける」という社説を載せ、この社説を転載するよう各紙に命じたが、北京の一紙の社長が「転載しろというなら辞職する」と言っただけです。

他紙の支援もなかなかのようです。ある新聞はその社説を敢えて載せそのまわりに4倍の大きさで「ネズミ、ゴキブリ、さようなら」という殺虫剤の広告を掲載し、またある新聞は横に並べた4つの記事の冒頭の文字を縦に読むと「南方週末加油」（南方週末がんばれ）と読める暗号紙面を作ったというのです。

こうした動きに当局も苦慮して現在のところ処分なしで鎮静化する模様です。

中国の放送人も同じ党の統制下にあります。制作者フォーラムの難しさだからこそ続ける意義があるのだということの両方を痛感させるニュースでした。

○毎日芸術賞

この元旦に、毎日新聞が制定する第54回毎日芸術賞が発表になりました。歌舞伎俳優坂東三津五郎、写真家荒木経惟、歌手谷村新司などの受賞者と並んで、私の属する「テレビマンユニオン」の名がありました。制作した番組の受賞ならここに取り上げる必要はないのですが、受賞理由に「（テレビマンユニオンの制作者）各人がすべて株主であり、請負でも月給制でもなく、創造力に対応した報酬と制作者の諸権利を保証した独特な経営方針にも注目したい」とありましたので、敢えて取り上げました。

制作者の、制作者による、制作者のための組織、を考えるということとはテレビマンユニオン創設からずっと続いてきていますが、放送人の会のありようも、その点ではどこか通底するものがあるように思います。もちろん、視聴者とのつながりあつてのことです。

さて、以上3題のお噺のキーワードは何でしょうか。そうです。「放送人」です。本年もどうぞよろしく。

新春 所感

年始めの短信 大原れいこ

「お元氣ですか？」と聞かれて一瞬たじろぐことが多くなった。自分のことなら「ま、ソコソコ」「主人お元氣ですか？」には「はア、何とか無事で……」と口ごもり「息子さんたち……」なら「メチャ、勝手に元氣してます」と即答。新年のただの挨拶くらいなら「ハイ、おかげさまで」と軽く受け流す。

そんな新しい年が明けて、元旦の朝刊にテレビマンユニオン毎日芸術賞受賞の記事がのりお祝いの電話がいくつか鳴った。ことの大小は別として、昨年EUがノーベル賞をもらった時ってこんな感じだったのかな……と、ヘンな連想がはたらいた。思い返せば40余年前、母船TBSを離れて開夜の海に漕ぎ出した20数人の小さなボートが、その後転覆もせずにも順行中というのはいまだに新年にちがいない。今では1000人を越す乗組員が動かす大型船だ。40余年の間にはボートの仲間を何人も見送った。小さな手漕ぎボートの記憶も遠くなっていく。

新春7日、大型船テレビマンユニオン、巳年の進水式。午前10時のビルに少し顔

を赤くして、三三七拍子で元氣なスタート。今年もみんな目いっぱい頑張るんだろ
うな、私だけは矢張り、ソコソコかな……？

北からの報告「減速する震災報道」

大類 啓

あの大震災から間もなく2年。時の流れとともに震災報道が消えていく。

「最近、震災報道がめつきり少なくなった」「関西に行ったらもう皆無に等しい」「(山形新聞2012年12月31日)―被災地隣の地方紙ですら1年を締めくくる大みそかの社説で嘆いているのだから穏やかでない。

新聞の震災報道が減速するというならTV局(特に民放)は店じまい気味である。がれきの山が見渡す限りの更地と化したらもういわゆる「絵」にならないからニュースにならないのだ。

攻守入れ代わるように、ここに来て震災本が力を発揮し出し、業界筋に言わせれば「目下、出版ラッシュ」。書き手も層が厚く、また一般書のように読者の機嫌をとるような姿勢もまず見られない。

例えば民族学者、赤坂憲雄の被災地ルポ「この国のかたち」。赤坂は今回の震災が起こるはるか以前に、地味なことこの上ない「東北学」を山形大学を拠点に立ち上げており、テーマである中央政府の東北支配を視座に説得力のある震災論を展開している。

例えば「その時、ラジオだけが聴こえていた」の稲泉連。戦没学徒、伊勢の竹内浩

三を死地のフィリピンまで追ったルポ「ぼくもいくさに征くだけだ」で世に出た若手作家だ。稲泉の怒りは戦争と震災を一直線に結んだ。

古代朝廷の国内植民地政策と東北民衆の抵抗戦争は直木賞作家、高橋克彦(岩手在住)の長編小説「火怨」でいかんなく描かれており、新年早々NHKでテレビドラマ化された。

震災から20年ほど前、山形県長井市在のフォークグループ「影法師」がオリジナル曲「白河以北―山百文」を発表していたのを、初めて知った。

原発みたいな危ないものはすべてこつち(東北)に押し付けといて／浮かれて暮らすのは都のお方……。

予見性に満ち、文明不信と中央の圧政に對する恨みで埋まった歌だ。

50代、4人のこの男たちの作品に今や「国防軍」が登場しかねない世相である。「絵」にならない、と悠長に構えているようでは、TVメディアは立ち位置を失うことになるだろう。ことは震災だけではないのだ。

「希望の翼」制作始末記

多くのハードルを越えて

大山 勝美

1月上旬、ソウルで零下15度の寒さに身体が硬直してしまった。

寒河江正氏と羅逸星氏の共著「あの時ぼくらは13歳だった」(テレビ神奈川・KB

S共同制作)の映像化も追い込みに入った。今回のソウルは、KBS映像資料の検索のためである。

1945年、寒河江氏と羅氏は、北朝鮮城津(現・金策)中学校の同級生だった。

日本植民地時代、禁止の朝鮮語を喋ったことで羅(当時竹永)は咎められる。寒河江氏は「朝鮮人が朝鮮語を話して何が悪い」とかばった。以後、離れ離れになって41年

目、天文学者になった羅氏が寒河江氏と劇的に再会し、音楽を通じての民間交流が現在も続いている、という話がベースだ。

旧満州時代、父が朝鮮人学校の教師だった私の少年時代を思い出し早速に「映像化」に手をあげたのだった。

寒河江氏の出身局、テレビ神奈川の上層部、牧内良平相談役、山崎行雄社長の決断は早かった。創立40周年記念番組として引き受けていただいたのである。KBSとの接点には「日韓テレビ制作者フォーラム」の古い韓国側友人たちが熱心に動いてくれた。

制作には、いくつもの壁があった。まず脚本。コーディネーター役の在日P氏の言うKBS側注文の内容が、じつはP氏個人の願いであったと判明したり、内容が固まるまで二転三転した。

キャスティング。寒河江氏の役を国広富之氏に決め、KBSは羅氏役を知名度のある韓国俳優で希望したが、脚本とスケジュール決定が遅れたため、日本語のできる在日でと変えた。羅役を元黒テントの金浩次氏、友人役を映画監督の林海象氏に決めたのは、韓国ロケ出発予定の3日前であった。

日本側は計画性を、韓国側はケンチャナヨ（大丈夫）精神でぎりぎり決めてるという制作気質の違いがあり、現場は相当に手こずっていたようだ。

監督は福本義人、カメラは旧知の川田万里氏となじみのスタッフで、日本での収録は天候に恵まれ順調だった。あとは、延世大学と同志社のOB合唱を伴った佐藤しのぶさんの歌の部分の収録だけである。

この番組で二つのことを感じている。ひとつは、これからは地域局が意欲的ソフトの発信地になる可能性がある、ということだ。キー局は体面や思惑もあってトラブルを避け穏やかな編成になりがちである。今回はテーマを確認したあと、表現のデテールには局側から一切口出しはなかった。

もうひとつは高名な俳優に頼らないということだ。ドキュメンタリードラマということもあって、テレビに露出はなくても実力のある人の適役主義で臨んだ。テレビの特訓は重ねたが、知名度のある俳優に劣らぬ成果をあげてくれたと思う。俳優から足を洗って8年目の金浩次氏、初演技の映画監督林海象氏や子役など、ユニークで新鮮な味を出してくれたと自負している。

2時間番組「希望の翼」の放送は3月2日（土）午後7時よりテレビ神奈川から、BS-TBSで23日（土）午後2時が放送予定である。

韓国KBSからは、オール吹き替えで、8月15日「開放記念日」に放送したいと伝えてきた。いまは多くの人にみていただき、話題の波紋がひろがることをスタッフともども願って願っている。

おらが春 花も嵐も 八十歳

荻野 慶人

年末の京王・井の頭線で、斜め前に坐る小学1年くらいの子が席を譲ってくれた。隣の父親が促したのかは気づかなかったが、「有難う。次で降りるから……」と笑顔を送った。

僕は今月末80歳になる。労わられて可笑しくない爺さんか……と苦笑する。

55年に亘る親友の藤本義一ちゃんは、昭和8年1月26日生まれで誕生日が僕より3日早い同い年だが、昨秋10月末に鬼籍に転じた「享年79」は、日本人男性の平均寿命で納得するしかない。

傘寿を機に賀状を卒業した筈の友人から「去年降ろした暮をもう一度上げたくなり……」とのアンコール「賀正」が愉しくて、あちこちで笑い話のネタにしたが、今年も同様の賀状が別の友人から届き、正直に同調していた僕は慌ててポストへ走らねばならなかった。

と言えど身軽に聞こえるが、実は、ほぼ100メートルを早足で往復できたのが嬉しいという近況だ。この頃駅までの約10分を歩くのが辛い。途中で右足の脛が痛み出し、激痛に近い時もある。1分も腰を下していれば治るのだが、「足が速過ぎる」とぼやかれたのは昔日かと、加齢を自覚する日々である。

聴覚劣化で電話に出るのが鬱陶しい。頻尿気味で夜中何度か起床するから昼間睡眠不足の感。眼鏡の置き場所を忘れてウロウロするのは日常茶飯事だ。

僕にも孫がいる。まもなく2歳になる女

の子だ。元目一緒に大宮八幡宮へ初詣しながら、成人の日の晴れ姿を見たいが一寸無理かな……と思う。

山奥の寒村に昔、年寄り70歳になると、次々世代に食い扶持を譲るため娘捨山へ不帰の旅に発つ掟があったと言った。「娘捨伝説」で知られ、深沢七郎の『檀山節考』が第1回中央公論新人賞（1956）に輝くと、木下恵介監督が映画化（1958）し、25年経って今村昌平監督もメガホン（1983）を取った。前者の田中絹代、後者の坂本スミ子、舞台の宝生あやこ（1979）が熟演した主役の「おりん」は覚悟充分、山へ行く日を早めるため丈夫な歯を自ら石臼で砕こうとするが、泣き喚き家族を手古摺らせる老人は珍しくない。「銭屋の又やん」に扮した木下版の宮口精二も今村版の辰巳柳太郎も生への執念は鬼気迫った。

木下は、絵に描いた山々が背景のオールセット撮影の、義太夫と三味線が全編に流れる舞台劇的演出で美しく仕上げた。今村監督は木下版とは対照的なリアリズムで、鳥獣の生態とダブらせて自然と共生するための掟をドキュメントしたが、同じ原作者の『東北の神武（ズンム）たち』と合体させることで、現代ではあり得ない昔話にして悲惨な顛末の後味を薄めようとした。人間社会の仮面を剥けば、それほど目を覆いたくなる地獄絵なのか。

僕も、どちらかと言えば気高い「おりん」ではなく醜い「又やん」だ。閻魔大王に報いる一矢を持ってない非力無能で、恰好悪く逃げ回るだけだ。

万雷の拍手で歓迎された筈の「政権交

代」は、僅か3年3か月で再び「政権後退」して元に戻った。「娘捨」時代なら敗軍の将の再登場は亡霊でしかあり得ない。現代は敗けても勝つても「政争ゴツコ」で、バツイチの羞恥心など片鱗も見えない。後期高齢を実感する度に、僕たちは「生きていてゴメン」と肩身を狭くしているのに……！

社会保障と税の一体改革……などと三党合意で唱えるが、施政が思う通り進捗しないのは少子高齢時代の故だと、どこかで政治家も若者も思っているのではないかと言えば卑屈すぎるか！

人間70歳になると「おりん」のように従容と現世を去ってゆくなら、高齢者対策や税金で悩んだり闘ったり殺傷したりしなくても済むのではないか！

「放送人の会」会報という損得抜きミニコミだから、おめでたい正月に敢えて偽らざる本音を述べさせて頂いた。

このままでいいはずがない

TBS 金平虎

NHKの片島紀男さんという人が、まるで遺書のように残していた作品集（DVDの非売品）が僕の家にあった。タイトルは『さらばテレビよ！それは「私」の人生だった』という。まさに氏の人生がパッケージ化されたようなすさまじい記録である。片島氏の作品で『私のゾルゲ事件 愛は国境を越えて』『ヴケリツチ夫人・山崎淑子』を僕は深い感銘をもってみた記憶がある。モスクワ勤務から帰って4年後のことだった。こういう作品を作っている人がNHKにはまだいるんだ。自分の周囲の環

境と引き較べて、嫉妬を超えむしろ憧憬に近い感情を抱いたものだ。

かつて放送人には矜持というものがあつた。そのことを片島氏の「遺書」を前にして思う。

重い枕から始まってしまった。重い言葉を重ねるのがこの原稿の目的ではない。むしろ逆だ。小説家・批評家・写真家の大竹昭子さんという人が編んだ『ことはのポトラック』という本を年末に読んで、3月11日の大震災以降の大状況のなかで、必死に懸命に何かを紡ぎだそうとしていた人々の、その表現の一端に触れた思いがした。気持ちが高ぶった。危機的な状況下にあつてはある意味でそれは必然であり、生きる証しの表出行為であつたのだろう。そこから僕自身も力をもらった気がした。これこそまさにポトラックだ。とりわけ詩歌や俳句、日本語の散文のもつちからの底の部分に触れるような感覚を共有した。

僕はもともと短歌とか俳句とかにはあまり興味が持てなかつたのだけれど、何かを紡ぎだしたい気持ちがなぜか沸々と湧いてきたのだつた。これは不思議な感覚だつた。そこで冒頭に戻る。

その時に自室の本棚に眼をやつた際、視界に入ってきたのが片島氏の「遺書」だつたのだ。『さらばテレビよ』それは「私の人生だつたよ」。その言葉の圧が一気に僕に迫ってきたのだ。

その瞬間から僕は自分の人生においてテレビジョンが占めてしまったものごととばで対象化する作業をこころみることにした。だから、これは詩でも句でも歌でもない「表出」にすぎない。

テレビジョン

虚無の箱となりし
哄笑の果てに

かつてアメリカのニュースアンカーのエド・マローが放送における商業主義の跋扈を前に警告した言葉を思い出す。何のために笑っているのか。テレビのなかの人々は哄笑。爆笑。哄笑。爆笑。その絶え間ない繰り返し。お笑いタレントが出演者の多数を占める放送のありようは、テレビジョンを「虚無の箱」にしつつあるのではないか。そしてそれを推し進めているあなたがた放送人たちよ。

セピア色の茶の間に
鎮座していたテレビジョン

記憶の彼方にあるテレビは、茶の間に布製のカバーをかけられてとても大切にされていた。自宅にテレビが購入される以前は、ご近所のテレビのある家に友達と連れ立って見に行っていた時代が僕らの子ども時代だつた。

瓦礫にて
いちばん目ざわりなり
液晶モニター

津波の被災地へ取材に足を運んだ時に眼にした光景は、シウルレアリスティックなそれで、脈絡のない物体が汚泥で繋がれてそこに意味を拒否する巨大な塊をなしていたのだつた。そのなかに、一番役立たず

で再利用のしようもなく、けれども大きな場所を占めていたものがテレビの液晶モニターだつた。その日は晴れていて気温が下がっていた。燃やせもしない液晶モニターは北風の下で太陽を反射していた。

深夜番組みて
殺意催すお前は何者か

テレビの荒廃をもっとも端的に示しているのが深夜帯の番組かもしれない。その時間、おそらく視聴者たちは一人で画面を見続けているかもしれない。

テレビジョンのなかで
輝いているあなたは疲れている

故・片島氏をはじめとする先人達の精力的な仕事ぶりに敬意を表しつつ、テレビの黄昏を直視する。このままでいいはずがない！

脱原発クルーズに参加

鎌内啓子

「脱原発クルーズ」は2005年に初航海。ヨーロッパが過去の戦争とイデオロギーを克服してEU共同体を作ったように、日・韓・中も東アジア共同体として和合していくという趣旨の船旅で今回は4年振り5回目のピース&グリーンポート。私のピースポート初体験は、1989年の暮れから1990年1月中旬までの3週間「南洋大航海」(シンガポール、ベトナム、カンボジア、インドネシア、ブルネイ)で、

作家の澤地久枝さん、弁護士・木村俊祐さん、軍事評論家・前田哲男さんも参加された有意義で楽しいクルーズだつた。今回は実に23年振りの参加。期間は昨年12月1日〜9日、日韓合同千人の「脱原発クルーズ」。コースは、博多、釜山、那覇、敦賀、博多。12月1日夕方博多港出航、船は3万5千トンのオーシャンドリーム号(パナマ船籍)で7階建ての大型船だつたが釜山までの冬の玄海灘は、かなり揺れた。釜山では「古里原発を通して考える韓国エネルギー事情」のオプシオンに参加し、古里原発を対岸より遠望し地元住民の話も聞いた。古里原発30km圏内には350万人の住民がいるが、安全面では問題が山積しているとの由。また韓国では都市の近くに原発が林立し16箇所に23基稼働していて新たに5基建設中とのこと。エネルギーファームの解説員は韓国の原発は日本の原発より技術力が高いので安全性は高いと強調していたのは可笑しかった。釜山から那覇までは1日中クルージング、那覇に近づくにつれてデッキに出ると春のような暖かい風が頬をなぞ、大海原と空を眺めていると改めて船旅の素晴らしさを味わった。

ピースポートの特長は毎回航海の趣旨にそつた水先案内というジャーナリスト、ミュージシャン、作家、NGO活動家、大学教授陣がわかりやすく鋭く語る講座やコンサート、イベントが盛り沢山で充実した船旅が出来ることだ。今回は、田中優(環境活動家)、後藤政志(元東芝・原子力プラント設計者)、鎌田慧(ルポライター)、宮台真治(社会学者)、松田美由紀(女優、写真家)、下村健一(前内閣広報審官・元

TBSキャスター）、他日韓22名が乗船した。毎朝出る船内新聞を見て、その日のタイムテーブルを自身で作し、広い船内をあちこち廻るのも楽しかったし、講座の後、突っ込んだ話を、時にはお酒を酌み交わしながら深夜までしたのも面白かった。参加者は、老若男女（生後4ヶ月から93歳）で北海道から沖縄まで全国から、原発事故被災者の福島からの人も数人いた。殆ど一人参加だが、皆、脱原発の考えに濃淡はあるにせよ志同じくしての参加者なのですぐに親しみなれ、話題が豊富で飽きなかった。敦賀では地元NPOが様々なプログラムを準備して、長年の原発銀座（敦賀、大飯、高浜、美浜）での闘いや苦悩もじっくり聞け原発問題の根の深さも感じた。中でも、明通寺の40年間反原発運動していらっしやる中島哲演（住職の「原発はどう考えても倫理として許せない」とドイツの脱原発と同じのお話には得心した。23年振りのピースボートだったが、運営は殆ど山ガールならぬボートガールで毎日船内新聞を発行、イベント、コンサートの司会、同時通訳、オブションの現地案内どれもパワフルな女子力だったしお洒落で格好よく素敵だったクルージングにまた参加したいと思う。

立川談志と仙台

木村 成志

去年の12月7日の夕方「立川志の輔独演会」を聴きにいとと会場近くのアーケード街を歩いていた時、天井から吊り下げられたイルミネーションが揺れはじめ、次

第に揺れ幅が大きくなってきた。地震だった。宮城県沖を震源地とするM7・3、仙台北の中心部は震度4の揺れだった。早めに会場に入ると公共交通機関が一時ストップしている事態なので、開演を遅らせたいと主催者のアナウンス。開催自体が危ぶまれるなか、今日の高座で志の輔は師匠立川談志の死について何か語るのだろうかと思つた。談志の死は2011年11月21日。1年余りの時間が過ぎている。

手元の略年譜を見ると立川談志生涯最後の高座はこの年の3月6日、川崎市で開催された「立川流一門会」で演じた『蜘蛛駕籠』だという。実はその5日前の3月1日、仙台市民会館大ホールで「立川談志一門会」の公演があり、私も聴きにいった。川崎の高座が生涯最後の高座なら、この日の仙台の会は「談志最後から2番目の高座」ということになるのか。

この日の談志は見るからに絶不調のよう、声はかすれ弱々しく、時に咳込む。高座着の襟に目立たないようにピンマイクを仕込んであるが、入力レベルをリミットまで上げているようでハウリング気味の音響だった。しかし、氣力を振り絞っての高座は小斬パレード、毒氣満載の漫談、『金玉医者』『ぞろぞろ』の落語2席で60分を超える鬼気迫るものであった。

この10日後にあの東日本大震災である。また、年譜によれば同月21日入院、「この際の気管支切開により、ほとんど声が出せない状態となる」。

もしかして、仙台での一門会を死を予感していた談志の「最後の挨拶」だったのか。

談志はかねがね高座で「仙台大好き。オレの第二の故郷です」と言っていた。芸人にありがちなリップサービスだったかもしれないが、それがすべてではなさそう。本人が書いたりしゃべったりしていることだが、昭和20年縁故疎開で現在の仙台北区根白石（ねのしろいし）に住んでいた。後に新婚時代、奥さんを連れてここを再訪している。また、「談志が仙台に土地を持っていたらしい」という噂が大分前から流れていたが、いつだったか仙台での高座で本人の口から事実だと聞くことができた。場内はどよめいた。そこはなんと私の出身、東北放送本社近くの住宅地だった。

談志は毎年のように仙台で会を開いていた。しかし、体調、殊にのどの調子は年を追うごとに悪くなっていくようだった。その時々私のメモには

・2007年5月、「立川談志独演会」、電力ホール（キャバ千人）。小斬と『金玉医者』『芝浜』。のどの調子（体調）悪そう。気分良く聴けない、とある。

・2008年6月「独演会」。電力ホール。当日会場入り口に「談志体調不良のため一門会に差し替える。よければ入るべし。ダメなら払い戻しする」の貼り紙。しかし、弟子たちが受けているのを見て芸人の執念に火がついたのか、かすれ声で『権兵衛狸』を口演した。

・2009年5月「独演会」。電力ホール。容姿、声の衰え痛々しい。『一人旅』『死神』『女給の文焼肉屋編』を演じた。この時、談志を聴けなくなる日がそう遠くないのではないかと思つた。やはりと言ふべき

か、この年の8月長期休養を発表、出演予定をすべてキャンセルしたと報じられた。12月には3か月の休養期間延長が発表された。

2010年、談志は仙台に來なかつた。そして2011年3月1日の仙台最後の高座。10日後の東日本大震災。談志のその後の死への軌跡を思うと、あの日の仙台の高座は仙台のファンへの「最後の挨拶」ではなかつたか。（参考年譜「ユリイカ」2012年2月号）（仙台市在住）

アジア旅番組国際グランプリ
2012に参加して

工藤 英博

「第2回アジア旅番組国際グランプリ」が昨年10月14日から4日間札幌で開催された。前年の「テレビ制作者フォーラム札幌大会」に引き続いて行われた記念すべき第1回大会には、仕事との調整がつけられず参加できなかったが、その成果は各国から評価され、大きな反響を呼んだと聞いていたので、予てから「第2回アジア旅番組」には参加しようと思つていた。長引く経済不況で地方の政治、経済は大きな打撃を受け、冷え込んでいる最中での開催は、宿泊、食事費用などの受け入れ負担や同時通訳の不足など主宰者としての悩みや問題は少なくないはずだ。「アジア旅番組」を企画し、事務局長としてすべてを取り仕切っている当会の林健嗣氏、実行委員長と審査委員長をつとめている今野勉氏の頑張りに、これといったお手伝いもしないが、

せめて仲間の一人として現場でねぎらいの言葉のひとつもかけてあげたかった。

会場のじやがポックルシアターは、産直市場や食堂街、温浴施設など北海道のエンターテインメントが集結した新千歳空港の4階にあり、日本国内初のエアポートシネマだ。2つあるスクリーンからの映像は臨場感があり、音響も良好でなかなか迫力があつた。

今回の参加国はアジア15ヶ国、上映された参加作品は50作品。懸念されていたことではあつたが、中国が直前になつて政府上層部の意向で不参加になつたのはかえすがえすも残念だつた。

栄えあるグランプリを獲得したのは「歩いて世界へ」。この作品は韓国を代表する旅番組のシリーズで全世界の国と都市をディレクターが訪れ、自ら撮影し、原稿を書く。今回の「豊穡の水路―ベトナム・メコンデルタ」編は、中国チベットから発源したメコン川が東シナ海に流れ込む河口のベトナム、メコンデルタ地域の自然とベトナムの豊かさを分ち合っている人々の日常生活を生き生きと記録した秀作であつた。

そして圧巻だつたのは、各国のインデペンデントの若手クリエイターによるシンポジウム（モデレーター・林氏）。それぞれが抱えている今日的な問題や課題、それらを克服しようとしている独自の発想や工夫、そして未来への目標や夢を極めて率直に吐露したことだつた。

最後の表彰式では各国の受賞者が挨拶の中で、皆一様にこのにほんの大会に出席できたことの喜びを語る姿が印象的で、更

に日頃から励まし、支えてくれている林氏へ向けて感謝の言葉も数多かつた。感銘は胸に刻まれ、ひときわ強まつた。

それにしても日中、日韓などのドラマの共同制作は難しいという話は以前からよく聞く。物価や人件費の違い、文化や歴史認識の違いは勿論だが、その国の暗部や恥部など影の部分の描写には限界があること、そして結構厄介なのがキャストینگで、主役をどちらの国から出すのか、などいろいろな問題が立ちはだかるからだ。

アジアの民族や文化は多様であり、人々が異文化を知る楽しみや好奇心を満たす上で、実際の体験を伴う旅の行動を映像化する旅番組は最も有効な方法であり、強力な映像メディアであると言える。国や民族の垣根を越えて、人々の交流が促され、アジア各国の観光産業の発展につながり、延いてはドラマの分野での共同制作を触発して前向きな影響を与えて欲しいと切に願う。

「放送人の会」が12年間、連綿と続けてきたアジア各国との交流が、確かな形で根づいていて、ここまで人と人を結びつけていることを会場で実感し、更なる期待を込めて次回も参加したいと思つた。

リセットと多様性

限部 紀生

年が改まると、旧年までのことは一応置いておいて、新しい年に期待をかけようと考えるのが習いである。今流に言えば、リセットしてもう一度やり直そうということだろうか。日本人はわりにこのような切

り替えが得意で、それなりに効果を挙げできた気がする。

それでは新年で何が変わるのかと言われれば、何も目に見えて変わらないし、旧態依然としたやり方で日々を過ごしていることの方が多い。しかし少し長いスパンで振り返ってみると、世の中はよくも悪くも急激に変わっているし、変わらない自分の方が世の中から取り残されていくような気がするのには年のせいだけではあるまい。

確かに科学技術は目覚しく発展し、社会はグローバル化してとどまることを知らない。しかしその変化に人間が対処するやり方、智慧はどうも立ち遅れているようだ。核兵器の出現で大規模な戦争は起きなくなつたと言われたが、この地球上で局地的な戦闘はあつたと絶えず、核兵器の拡散で人類の滅亡につながる危機がまだ残っている。それどころか、原子力発電の危険を改めて知らされ、将来のエネルギー計画の再設計を迫られている。

交通、通信技術の急速な発展で、世界はあつという間にグローバル・ビレッジになつた。先進工業国の大企業は人件費の安い国に工場を移転するのに追われ、発展途上国では、初めは外資による雇用拡大や賃金を歓迎しても、やがて賃金の引き上げを求めて立ち上がる。先進国のファッションはあつという間に、途上国まで広がるが、奥地の農村地帯との格差は拡大する。

こんな中で、昔から変わらない問題の最たるものは、領土の境界紛争である。海の資源めぐる思惑で争いは増えてきている。領土問題を争う国々の間で平和的解決策

を見つけるには南極のように領土権を凍結して、各国が共同利用する方式が望ましいが、それも簡単な話ではない。

こんなさまざまな問題がある中で、日本では政権党が変わり、中国、韓国では政治のトップが交替した。新しい指導者は前指導者との違いを強調して目新しい政策を提示するが、果たしてどこまで新しいのか、実効性はあるのか。それぞれ身近なところで、リセットされた政治の状況を厳しく監視していくほかはない。

その監視に当たって私たちが心しなければならぬのは、まずすべての政策について十分多様性が確保されているかどうかである。多様性と聞くと「何でもあり」でなければならぬと言つて、単に並列的にいろんな筋道を並べて事たれりと思つている人が多いが、そんな簡単なものではない。多様な筋道について絶えず冷静に比較検討をしてよりすぐれたものを選ぶようにしておくことが重要である。現代のように複雑な社会では、すぐに最適な解が見つからないこともあるが、一つの解が駄目になつても別の解が使えるようにしておくことが重要だ。日本人はこのような真の多様性の確保を決して得意としていない。心したい事柄である。

ローカルでの番組制作

酒井 美樹男

田原茂行さんの推薦でこの会に入つて7年目となりました。この間これといった貢献もできず、反省することしきりです。現在、福井のローカル局で番組制作を統括

しています。小さい所帯ではありますが、放送産業と放送文化の狭間を毎日行き来しながら、少しでも良質なものを、新しいものを目指して活動しております。

折角の機会ですので、昨年弊社が制作した話題になった2つの番組を御紹介します。

ひとつは、報道部が制作したドキュメンタリー「原発の町に生まれて」誘致50年福井の苦悩」です。福島第1原子力発電所の事故後、日本中で「脱原発」の声が強まると、全国最多14基の原発を抱えた福井県は大きく揺れていました。弊社も立地県の報道機関として何をなすべきか社を挙げて議論しておりました。

国から再稼働の要請を受けた大飯原発。連日全国ニュースのトップ項目で扱われる情報に接して、多くの福井県民はこれまでに悩み、原発と向き合い、今後の共生について真剣に考え始めていました。

福井のローカルでしか肌感覚で解からないこと、立地から50年を経過して風化しつつある立地に至る経緯、これらを原発銀座と言われる敦賀に生まれた若手記者が一人称で語った番組がこのドキュメンタリーでした。原子力行政に翻弄され、真剣に悩む県民の姿を、あくまでも中立の立場で映し出すことができたと思います。この番組は民放連の日本放送文化大賞准グランプリを受賞しました。これは福井テレビにとって大きな励みとなり喜びとなりました。

もうひとつは、制作部が担当して制作した「ママからの手紙」10年後に届いたメッセージ」というドキュメントです。10年後

の我が子に母親が手紙を送るというイベントで2000年に集まった手紙の数が800通。2010年に満期を終えて発送されましたが、60通が舞い戻ってきました。

この60通を届け、開封する瞬間をカメラで追ったドキュメントがこの番組です。10年という時間に、親との死別、離婚など、いろんな試練が家族を待ち受けていました。思春期の真ただ中ではほとんど会話しないう「我が子」たち。しかし10年前の母親の手紙が開封される瞬間に、空間の雰囲気が一変して、子供たちが蚊の鳴くような声で「ありがとう」と感謝の言葉を伝えます。母親の愛を感じさせる番組になりました。この番組は放送文化基金賞テレビエンターテインメント部門で番組賞を受賞しました。

また、審査委員長を務められた堀川とんこうさんとこの授賞式でお話ができたことも、私的には、有意義でした。

年が明けて、今年も新たな番組作りにチャレンジしています。ひとつは近未来の少子高齢化社会を描いた、「ありそで！なさそな？近未来」という番組です。的確に、しかし適度に、現代の「兆し」から近未来を読み解く「デキメンタリー」という手法を創作し、正月にオンエアしました。現在視聴者からの評価待ちです。

そして、「アジア3国共同制作番組」。18年間、毎年1本の割合で、中国杭州文化広播電視集団と韓国春川文化放送とで共同制作を続けていますが、幹事が今年、福井テレビに廻ってきます。尖閣・竹島問題など取りざたされる折、良質で相互理解を図ることのできる内容をアジア3局で現在

模索中です。

本年も、放送人の会の皆様方のご意見・ご講評を頂戴しながら、福井「ならでは」の番組を作っていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いします。

二つのドラマ 寒河江 正

NHK大河ドラマ「八重の桜」と、tvk（テレビ神奈川）開局40周年記念「希望の翼」あの時、ぼくらは13歳だった

右記2つのドラマとも、私と深い関係がある。新島八重は後に同志社創立者新島襄先生の妻になった人である。

私の高校は東北の仙台だが大学の4年間は母校・京都の同志社で学んだ。1月6日（日曜）「八重と桜」をみた。大河ドラマのオープンはこれほど派手に見せない

と視聴者は納得しないのか、先ず驚きが先だった。初回とあつて番組は八重の幼少の頃を描いていたが、子役は後の八重の鏡への拘りと気丈さを彷彿とさせる演技で見事に表現していた。八重を知るキーワードがいくつかあることをNHK広報で知っていたが、今回はふる里、会津の教え「ならぬことはならぬ」が何度も繰り返されていた。ドラマの後半は京都で夫、襄先生との出逢い、同志社大学設立にどんな苦労があったのかなど、同窓の私たちには見逃せないドラマが展開されそうである。

一方、tvkのドラマはNHKの大河と比べるとスケールこそ小さいが今日のいやや今後の日韓関係をどうするかを総監督の大山勝美氏が私共の原作を活かしなが

ら描いてくださった。

大山氏は昨年の9月、朝日新聞の夕刊「人生の贈りもの」のシリーズ（2012年9月25日 朝日新聞夕刊）で「日本の戦後は、アジアでは終わっていないという気がしています」と述べている。この思想が今回、ドラマの基調になっており、私共の「あの時」ぼくらは13歳だった（羅逸星・韓国天文学者 寒河江正・放送人 東京書籍）が刺激になり脚本づくりのヒントになったと伺った。作品は日本と韓国の民間交流を題材にしたドキュメンタリードラマに仕上がった。更にこのドラマの制作過程で「日韓の友情 実録ドラマ、tvkが韓国・KBSと共同制作」と大きな見出しの記事にもなった。（2012年11月14日 読売新聞）

放送は、tvk（テレビ神奈川）2013年3月2日（土）19時～20時55分 BS・TBS（全国放送）は3月を予定。韓国、KBSの放送日時が3月8月を予定。いずれも2時間の放送である。

人間の本质に根ざした媒体

志津木 敬

京阪特急のテレビカー廃止にもうかがえるように、放送・放送番組は、パーソナル・メディアにはなりづらいものがある。活字文化との隔たりも依然として大きい。つい最近まで、多くの大学関係者の間ではFD（Faculty Development）に関して、「フロッピー・ディスクか」といわれることはあっても、「フロアー・ディレクターか」

といわれることはなかった。

しかしそれらは一方では放送・放送番組が関連づけ、意味の抽出の上で成立していること、ひいては人間の本質である自我に根ざし、自我を呼び覚ます媒体でもあること、をうかがわせている。私自身でいえば、大河ドラマ『樫ノ木は残った』の原田甲斐の青春編は、大学教育学会の前身である一般教育学会の設立経緯、及びその前史に関する研究の方法論の格好の手掛かりとなつた。それは、新制大学移行から30年経った段階での学会設立であり、そこに至る過程と意味の抽出が問われる性質を持っていた歴史であつたことが挙げられる。

一般教育は、過程や現象のなかに混在している意味を抽出、広く社会に再構築を試みる教育概念である。当然ながら、そこでは過程が重視される。人間の本質である自我と職業遂行の関連性が問われる。一般教育の教育概念からする限り、大河ドラマ『樫ノ木は残った』の原田甲斐の青春編さらにいえば歴史が生まれていく過程が重視される歴史ドラマのコンセプトは、それまでの教育史や歴史学ともまた異なつた一般教育史という新しい領域の可能性すら示唆している。

フロップ・ディスクは既に使命を終えた。しかしフロアー・ディレクターがなくなるというのではない。私が年1回、企画司会・進行しているラウンドテーブルにしても、題材の取り上げかたは『おかあさんといっしょ』『これなあに』から、コンセプトは『ニュースセンター6・30』で用いられていたインターローカルから、それぞれ得ている。とりわけ、後者は、規範科

学と政策科学の有機的相关性として敷衍できる。いずれにしても、放送・放送番組は、授業におけるマルチメディアの活用に止まるものではない。この度の放送人の会入会を契機に、人間形成と放送・放送番組について改めて考えたい。ご指導、ご助言を賜る次第である。

屠蘇酔い談義

鈴木典之

会員の加賀美幸子さんから案内をもらつて、暮れぎりぎりの3日間、NHKテレビで早朝放送を観ることになった。(12月29・31日)。

この1年の間に亡くなった著名人の内、森光子・大滝秀治、新道兼人・原田正純、吉田秀和・藤本義一がベアとなつた30分の追悼番組「耳をすませば」で、故人の大きな業績の一端と折々の心境を語る映像が簡潔に編集されている。ナレーションは加賀美さんで、彼女特有の端正でハートフルな口調と迫力のある映像構成とが相乗して感動を誘ひ、思わぬ「拾いもの」をした喜びを味わえた。6人の生前にそれぞれ個人的な小さな思い出もあつて感慨深かつたこともあるが、手抜きのない仕事で「珠玉」の輝きを放つていて、人目に触れにくい時間帯の放送だけではもったいないとも思えた。

加賀美さんは、アナウンス術の練磨にいまなお励むご自身の成果を試すためではなく、番組作りに労を共にした若い制作者の真摯な取り組みぶりに心打たれ、その熱意が報われることを願つて案内くださったよう、その心根がまたうれしくて、小

生の年越し気分を爽やかにした。

大晦日の紅白から三が日に至るテレビは、派手なにぎやかさは装つていたが、印象も味わいも物足りなかつたように思う。紅白で唯一期待した美輪明宏の「ヨイトマケの唄」も凝りすぎて素朴な迫力を失つていたし、「ニッポンのジレンマ」も去年の初々しい衝撃から遠く、長時間ドラマ「白虎隊」も創意の盛り上がり欠け、箱根駅伝も中継のマンネリ化が耳障りで音声を消した。明らかにテレビはパワーダウンの中での内向き競争で、放送開始60周年の幕開けがこんなことではないのかと懺然たる感が先に立つた。居ながらにして森羅万象を眼前にできるテレビの機能の重宝さを、近頃改めて新鮮に捉え直しているが、単に番組の玉石混交ではなく、メディア経営の根幹が衰弱しているように思えてならない。テレビの60年と並走し、共に深く関わつて来た筈の当会の先達同輩諸公の見方はどうだろうか、尋ねてみたい気がする。

それというのも、昨年末、当会が進めるオーラルヒストリー記録「放送人の証言」の活用研究会(別項P13・14の報告記事を併読ください)に顔を出してみ、放送現場のいまの流れに委ねることでテレビは大丈夫なのかと、ふと思つたからだ。小生の頭の中には、東大情報学環の石田英敬教授が漏らしたひと言が強く響いている。彼はいつたのだ、「放送人という興味深い人々の思考方法を検討することがテレビ研究に役立つように思える」。講師役の当会・桜井均さんによれば、「石田さんは、「放送人」という珍しい人種からレヴ

イ・ストロースのいう「野性の思考」(パンセ・ソヴァージュ)を取り出してみたいと考えている」のだそうだ。「放送人の会」は「野性の思考」の集団だろうか。学問上のことはわからないが、現代人の深層心理に否応なく食い込んでいくテレビの本質に、放送現場人の創意と思考を推理する着眼には興味をそそられる。桜井さんの見解を伺つてみたいものだ。

一方で朝日新聞は、元日号から「ビリオメディア」(10億人超のメディアの意)の特集を一面に載せ、ツイッターやフェイスブックなどソーシャルメディアによる情報交流の拡大を重視し、新聞報道に取り込もうとしている。これは、先行するテレビを卓見「入れ子構造論」で明解に分析されている前川英樹さん(会員)あたりに改めて分析してもらえとありがたい。

千鳥足めいた運びになつたが、要するに小生は、放送を基盤とする当会のメンバーが内蔵している経験知の膨大な集積を、この機に再活させる機運を刺激してみたのだ。

当会は4月から法人化する。法人化の当面の理由は、外部からの寄付金受け入れの公的窓口作りとされているが、それだけでは淋しい。若い会員を増やし、会の持続の足固めを図るためにも、現状脱皮の雰囲気作りも欠かせないように思われる。会報やホームページは、百家争鳴のための恰好な「場」になりはしないだろうか。

UFO、神子原米 中崎 清栄

取材を続けている自然栽培者が目標に

するのは山の草木。農薬や肥料を与えないのに元気なのは、目に見えないバクテリアが活発な土を作るからで、化学肥料や農薬が抜けた放棄田の方が、条件が良いと言う。放棄田の再生は過疎対策にもなるので広める一助になりたいと願うのだが、挑戦する生産者も少なく、時間がかかると実感している。

そんな中で聞いた東京のコンサルタントの「自然栽培の米や野菜は安全だから絶対売れる、売り方次第、演出」が20年前に高野誠鮮さんから聞いた「町おこしはマスコミ起し」の言葉を甦らせた。

高野誠鮮さんは石川県羽咋市役所職員兼日蓮宗のお坊さん。半生をまとめた「ローマ法王に米を食べさせた男・過疎の村を救ったスーパー公務員」が昨年大ブレイク。わんさと訪れる視察団にわら半紙の資料を千円で売ったら予算ゼロの課が裕福になったと笑う。

スーパー公務員は講演依頼も多く全国を飛び廻っているが、その昔はイレブンPM（日本テレビ）の制作者だった。

昭和59年に家業の寺を継ぐために故郷に帰り、石川県羽咋市役所臨時職員になり、入団した青年団で「町おこし」に参画。

お年寄りの「あの辺の空に丸い物が浮いていた」を捉え、熱心に動き出したのはイレブンPMで培った魂「スズメ百まで踊りを忘れず」に違いない。

「面白そう」と思えば取材のように世界どこへでも・・・、特にNASAには自費で幾度となく出かけて人脈を作り、手にした宇宙の石や宇宙服等を展示する宇宙科

学博物館（コスモアイル羽咋）を建設してUFOの町に！と動き回るが、市民の多くは大反対。

そりやそうでしょう。

「帽子型の寺の鉦（宗八盆）に似たUFOを見た！と聞いたから、UFOの町だ」と言われても納得しかねる。

しかし懲りない活動が功を奏し、街中に溢れるUFOの文字・・・UFO饅頭、UFOラーメン、UFOパチンコetc.

竹のようなしなやかな行動力が功を奏し、立派な宇宙科学博物館が建った時には市民も驚いた。

しかし、賑々しいテープカットの後に高野さんに待っていたのは左遷、農政課への配転だった。

萎えた気持ちで農道を歩き、見つけたのが次のテーマ「農業」。味が良いと評判の米だが、生産者たちが高齢では継続はない。

「役に立つから役人」が持論の高野さん、左遷先でも突飛だった。

土地の名「神子原」に焦点を当て、僧職らしい？融合の心でローマ法王に「この米を召し上がっていただく可能性は1%もありませんか？」と手紙を出し、返事が来た。売り方にも知恵を働かせたので「神子原米」は収穫と同時に売り切れる人気商品になり今、生産者は胸を張っている。

思えば手紙は高野さんの常套手段。UFOの時も「UFOの町をご存知ですか？」と世界の超有名人、ダライラマやレーガン、サッチャーに送り、返事がくると「手紙が来た」と地元紙や放送局に一斉にFAX。

CIA戦略に学んだ「人は目と耳から入った情報によって心を動かす」を実践して情報を出し続けると強固な反対者も微妙に「どうも本当らしい」になる仕掛け上手な制作者。

世の中には仕掛ける人と乗る人がいるが、こちらは残念だが乗る役。

20数年前にはUFOで町おこし番組（30分全国放送）を作り、今また「神子原米」に続く彼の新たな仕掛け「自然栽培」に乗っている。放棄田が再生して無農薬、無肥料の農産地になれば交流人口も増え過疎も幾分和らぐと、スポンサー探しをする程入れ込んでいく。

高野さんがよく言う「役人には3通りある①居て欲しい人 ②居ても居なくもいい人 ③居ては困る人」に、役人ではないけれどドキツとし「役立つ人になりたい、田や畑を歩いて今の農村情報を伝えたい」と相棒の辻本氏と話し合っている。

狂言・時代劇

鯨りんたろう

新年明けましておめでとーございます。

昨年の春から、狂言の稽古を始めた。NHKには以前から狂言の同好会があり、縁あって、そこに入会したのである。人間国宝の大蔵吉次郎師の指導を受け、小舞「盃」をはじめに、昨年の暮れには、狂言「盆山」を、国立能楽堂の研修舞台で初お披露目した。とみに最近、時代劇の演出が増え、それならば古典芸能のひとつも齧っておきたい、というのが始めた理由である。また、

普段は演出する立場だが、舞台で身を晒す役者という立場に身を置くことで、違った何かが見えてくるのでは、という好奇心もあった。

たかだか9カ月で、何かを語る資格がある訳でもないが、ひとつ感じた事は、日本語とはどのような「音」で成り立っているか、である。周知のように狂言は、言葉のひとつひとつを粒たてて発音する。その際母音の「あ」と「い」をどう生かすか、厳密な決まりがあり、それをする事で、言葉が際立ち、遠くの見物（観客）にまで、しっかりと台詞が届く。ふだん何気なく口にしてる言語を、微分積分し、最小単位まで遡って解析するのは、物語の背後の神話をさぐるような、不思議な面白みに満ちている。

言葉だけではない。動きのひとつひとつにも、数百年を経て研ぎ澄まされた、単純にして最も効果的な身振りがあふれる。そこには、生半可な「個性」など入り込む余地のない、確固とした様式が存在する。やたら個性尊重をするあまり、独りよがりの演技が蔓延る昨今、それとは対極にある古典芸能のメンソッドは、個性とは何か、という事を、あらためて考えさせてくれるのである。さて新年、始まりは「時代劇専門チャンネル」の初仕事、「新・御宿かわせみ」である。じつは今から30年前、初演出の作品が、「御宿かわせみ」だった。不思議な縁を感じずにはおれない。ただし今回は、時代がめぐり、明治初年が舞台となっている。主演は真野響子さん。真野さんとも、実に30年ぶりだ。原作はもちろん平岩弓枝氏、そして脚本は中島丈博氏である。次

に初夏から夏にかけて、NHKドラマ10の現代モノが、秋には、連続時代劇が控えている。それらの合間に、岸恵子さんの朗読芝居「蟬しぐれ」が三越劇場で予定されており、今年はいっつがなく、多忙な1年となりそうである。

還暦も 目近な五体に 冷氣刺す

本年も、どうぞよろしくお願いいたします。

(NHKエンタープライズ)

幸福な若者たち

三原 治

私はラジオの授業を日本大学芸術学部放送学科で担当しています。数ある大学の中でもラジオ専攻があるのは日芸だけです。放送学科でもテレビではなくラジオを選んだ学生たちですが、ネット世代の感覚で授業を受けています。一番接しているメディアはインターネットで、その次はテレビ。テレビは特にアニメが大好きで、ドラマもそこそこ観ている様子。ラジオは、「高校時代には聴いたが今はあまり…」というのが大半。彼らにラジオ深夜放送の黄金時代である70年代の話をすると、興味津々で聴いてくれます。ということで、若者論の話をしましょう。

日芸の私の生徒を何年か見ての感想ですが、最近の若い連中は「普通」です。日芸は遊び心が他の大学よりも多い変な大学ですから、「普通」では物足りなく感じています。でも、30数年前の私たちも上の世代からは、「今の日芸生は地味で平凡

だ」と言われました。そう言われながら4年間で充分、変なやつになって、社会へ出て行きました。

近頃の若者たちから感じた新たな変化があります。不幸な時代に生まれた今の若者たち。日本自体が元気がない中で、少子化もどんどん進み、若者は少数派へと追いやられています。団塊の世代なんかと比べたら、未来への期待度なんてとても小さなものです。今、アニメで世代が大別されるそうです。「アトム世代」「ガンダム世代」、そして今は、「ワンピース世代」です。抑圧社会ニッポンの中で、自由と仲間が最重要な世代が誕生してきたのです。私のような「ガンダム世代」は、「アトム世代」の先輩たちの築いたものを受け継いで、次の世代へと橋渡ししなければと思っています。

数年前に刊行された本で『絶望の国の幸福な若者たち』(古市憲寿著)が話題になりました。この不幸な時代に20代の7割が「満足」しているという内容。今の若者は不幸せに違いないというのが、定説だったはずですが、この本は見事にその若者論を覆しました。実際、私の周りの学生たちは、幸せそうです。アルバイトとサークルに明け暮れて、疲れ果てていますが、自分の未来設計を立てて生活しています。しかし、日本社会はバブル崩壊後、経済的には良いことは何もありません。さらには阪神淡路大震災、東日本大震災を経験し、日本は大丈夫か? という時代を生きてきました。それでも幸せだという今の若者たちは、海外旅行や車には興味なし。ケータイとコンビニがあれば満足で何の文句もないの

です。「政治が悪い!」なんて不満や疑問もなく、選挙にも行きません。

昭和32年生まれの私の時代は高度成長期で、夢を見ることは出来ました。今の時代は、夢見ることもできないところまできています。身近でささやかな喜びに「満足」して、それを「幸せ」と受け止めているような気がします。

若者が夢見ることの出来るような世の中になつてほしいですね。安倍新政権の右傾化を目の当たりにすると、もしも日本が戦争なんてことになったら、戦地へ行くのは若者です。そんな時代にしないような放送メディアであつてほしいと願っております。

放送メディアに信頼性が薄れている今、権力の監視や弱者の声の反映、世論の形成、議題形成といった社会的使命も放送メディアにはあるということに危機感を抱いている今日この頃です。

年頭所感

山県昭彦

わが国情、政経共に針の權もて荒海に挑むが如く、加えて言論惨憺、舟行いよいよ難し。行くも戻るも待つは沈没。間隙を縫って極右抬頭し、正にナチス・ジャパンへ幕進の態。さらば以今は煎餅蒲団などにくるまり、ひたすら寝たふりを決めこむに斯かず。ついで己を啗う腰折れの一句ー。

老犬の薄眼開けたる日なたぼこ

話は唐突ですが、わが住む町の片隅に、ビーフシチューの美味しいカフェを見付

けました。これぞ日本国民への貴重な朗報でありましょう。しかし、もしかして味付けの秘訣に、セシウム有りかとも案じています。よろしく

田中正造翁没後100年に

山路 家子

塩原温泉の表家で新年を迎えました。ちらほらと雪が無い、山々は白い薄化粧湯けむりに包まれながら、

「ふるさとはいいなあ」と思う。

小学校、中学校の同級生が訪ねてきて、他愛のないおしゃべり、

「ふるさとと友達はいいなあ」と思う。

そして、ふるさとに戻れない人々のことを思うのです。口惜しいです。辛いです。怒りがこみあげてきます。

ふるさとには地方紙があります。栃木県では「下野新聞」、懐かしいです。正月の紙面には、「田中正造翁没後100年」の記事が大きく掲載されていました。

日頃、翁に関する書籍を枕元に置いて崇敬の念を抱き続けている私は、身を乗り出して行事の数々をチェックしたことでした。翁の言葉の一つに、「真の文明ハ、山を荒らさず、川を荒らさず、村を破らず、他人を殺さざるべし」があります。原発事故は人を殺していないでしょうか? もう一つ「デンキ開ケテ、世間暗夜トナレリ」、3・11以前から、私は冷蔵庫無し、エアコンも使わずの生活をしていましたが、翁の思想が知らず知らず、身に染み込んでいたのでしょうか?

有吉佐和子著「複合汚染」には、山形県

高島町の有機農業者が登場します。その高島の林檎をお裾分けにあずかりました。添えられた手紙には、まず放射能汚染の心配はないこと、気候低温の時期に蜜蜂が飛ばず、手作業で授粉を施したこと、袋かけは蛾の幼虫から守るためであること、等、ご苦労の数々が記されていました。

特に胸を打つのは、放射能不検出であったことについて、「長年の土づくりによって生成された腐植や、粘土鉱物などが、セシウムを吸着してくれたのだと思います」、更に、「樹齢50年の古木からも美味しい果実が実った、そのベースには、長い歳月をかけて培ってきた土の力があります」の数行です。

「力ある土」が、どれ程の年月の汗と努力の賜物か、少しでも畑の体験をした方ならおわかりでしょう。原発事故はその土を殺しています。除染しても除染してもその土を甦らせることが出来るとは思えません。足尾銅山の鉱毒が、渡良瀬川流域の田畑を殺した時、村民はその鉱毒に汚染された土を、剥がしては毒され剥がしては毒され、の繰り返しでした。その状況を、いま、悲しく思い重ねてしまうのです。

田中正造翁は次の言葉も遺しています。「少しでも人のいのちに害ありて、少しくらいハよいと言ふなよ」。

今の政治家は（政治屋の多い昨今です）諸氏に、嘸み締めてもらいたい！

東日本大震災の復興予算を平気で流用し、原発事故の故にふるさとへ戻れない何十万という人々の現実があるのに終息宣言を出したり、原発再稼働させたり…選挙

で惨敗しても何の不思議がありません。や？

「私の責任において」と言った「責任」は、どのように果たしてくれるのか、言葉遊びはもういい加減にしてほしい。

2013年は、「責任をとる」「責任を取らせる」を徹底したいと念じています。正造翁に更に学びつつ。

初夢は正夢になるか

渡辺 純史

新年、ひとは清々しい気分か思いを新たにする。だが、ここ数年、私の場合、その思いは、余って溢れ、飛び散って、悲憤慷慨となる。現場を離れて10年、まだ心半分、身半分、放送の世界に身を置いているつもりは、当然のように、我がメディア界に悲憤慷慨している。

歳末の総選挙以来、今年はその思いが甚だしい。選挙は自民圧勝、民主惨敗、結果として安倍政権が誕生した。争点だった原発問題、憲法問題、消費税問題は何処かに去り、新政権祝勝モードの中で株高が続き、アベノミックス効果が喧伝される。あらためて、あの選挙は何だったのだろうかと思ふ。3年前、民主政権に期待した民意がNOを突き付けただけで「アベ」シャンレジューム政権の誕生だ。

選挙の翌日、朝日は社説で、小選挙区制度は政権交代をたやすくさせる制度であり、ポピュリズムがはびこるこの世の中では、こうした現象は容易に起こりうることを指摘したうえで、国民が有権者であつても主権者足らざることを嘆いて見せたが、

朝日に限らず、いずれのメディアも、ポピュリズムをもたらしたメディア自身の責任に言及したものはなかったように思う。

民意の劣化を言う前に、劣化した民意は、誰がもたらしたのかを知るべし。わかりやすさと中立性を隠れ蓑とし、己の判断を避け、民の興味興奮を煽り、事の是非論、方法論ではなく、態度、やり方、果ては容姿、顔貌の是非論でモノを評価、批判してみせ、もともと議論の下手な国民を議論の核心から遠ざけ、ただ批判、否定の民意を形成したのは誰か。劣化したメディアが民を劣化させる、それは自明のことではないか。

屠蘇が加わり、憂しき世を嘆くばかりの元日の朝、その朝日の紙面で、若手記者を動員して、特集「ビリオメディア」の掲載を始めたことを知る。10億（ビليون）を超える人たちが、ソーシャルメディアを発信する世界を「ビリオメディア」と名付け、自らがソーシャルメディアを使い取材した、特集シリーズである。読者は、紙面を読み、さらにホームページ上で、記者とやり取りし、他の読者の意見に触れる。紙面に載らない情報、記者からも読者からも、継続して発信される。

いいじゃないかと、今度は感心し、屠蘇を助けの昂ぶりの中で、初夢を見た。その初夢である。新年、3つのメディア関連法案が成立する。

ひとつは、番組内のコマースシャルの禁止法案。番組内に挿入される15秒から30秒単位のスポットコマースシャルによって、特情報番組においては、情報量が制限され、情報質が希薄となること、情報の寸止め、繰り返しの強調等と併用されて、番組がバ

ラエティー化すること等が問題視された。法案には経済界が反対したが、テレビ総時間内のコマースシャル総量には規制がないことから、最終的に放送界も賛成したという。なお、番組の中にコマースシャルが挿入されない韓国の例は有名。今後、ワイドショーという情報番組がどう変貌を遂げるか注目される。

二つ目は、すべての記者個人の原稿アーカイブスを、新聞通信社のウェブサイトにアップすることを義務付ける法案。

三つ目は、放送各社に、各種記者会見の収録素材全量を一定期間、ウェブサイトにアップしておくことを義務付ける法案である。

いずれも、読者視聴者が、紙数や視聴率獲得を前提とする商業主義の企業メディアと向き合うだけでなく、良質の個々のメディアに直接の発信者と向き合うことで、バイアスから解放されて、正しく深く情報を読み解き、さらに顔の見える情報のやり取りが可能となると、読者視聴者が自分自身の考え方を形成するための画期的な法案で、経営的に紙媒体からの転換を視野に入れる新聞各社も賛成したという。既存メディアとソーシャルメディアの新しい出会いである。

メディアのありようが、この夢のように、法案という形で、公権力で決められては身も蓋もない。この程度のことでは、メディア自身の改革で、正夢になるはずだと、簡単に決めつける自分自身に腹を立てたとこ

ラジオの広場

石井 彰

「ラジオを楽しむ」セミナー始まる!

横浜の放送ライブラリーで公開セミナー「ラジオを楽しむ」が始まった。第1回は、2012年12月8日に毎日放送のラジオドラマ「鉄になる日」小松左京著『日本アパッチ族』よりを試聴して、制作者たちから制作の舞台裏を聞いた。

原作の『日本アパッチ族』は故・小松左京さんが初めて書いたSF長編小説。大阪の軍需工場跡地に鉄を食べる鉄人が現れて、日本政府や米軍と戦うという壮大な物語。原作を換骨奪胎して現代に移し替え、働かない人は罪に問われ、この跡地に作られた収容所に追放されたことから始まるドラマだ。

同番組は芸術祭大賞、ギャラクシー大賞、アジアの放送コンクールABU賞受賞など最大の話題作。当日は150人以上の一般参加者とFM秋田、山形放送、東北放送、ラジオ日経、FM横浜、KBS京都などの放送局関係者が集まり、関心の高さを証明した。

脚色・演出の毎日放送島修一さん、音響効果技術の小池佑治さん、音響効果の濱谷光太郎さんから、語られた番組制作の苦労には、数多くの発見と感動があった。「鉄を食べる音は、まず「歯に当たる」「噛み砕く」「飲み込む」に分解して、「噛み砕く音」は万力でボルトやナットをはさみ込んで潰し「ジャリ」という音になったという。

また15人で歌う歌を、どのように1万人が

歌っているように聞かせるかなど、低予算でありながらスタッフの知恵によって、聴き応えのあるラジオドラマが誕生した経緯が語られた。

「ラジオを楽しむ」セミナーは、今後も年数回、また地方での開催も企画されている。低迷するラジオの活性化につながっていく催しなので、放送人の会のお力添えを得たい。

市民がスポンサーとなって作る新番組「ラジオフォーラム」が放送開始

毎日放送の優れたラジオ報道番組「たね蒔きジャーナル」が昨年9月末に打ち切りになった。同番組は小さなニュースの種を見逃しません、をテーマに、アナウンサーや報道セクシヨンの記者たちが自分たちで取材して2009年に始まった。東日本大震災と東京電力福島第一原発事故後は、政府や東京電力の発表報道たれ流しに陥ることなく、原子力発電所の危険を以前から伝え続けてきた小出裕章京都大学原子炉実験所助教がほぼ毎日ゲスト出演して、原発事故の真実を伝えてきた。

またインターネット放送により、関西圏だけでなく全国そして世界中から注目され聴かれる番組になった。番組打ち切りが8月に伝わる、聴取者からの存続のお願いが局に相次ぎ、1万人以上の存続署名、市民自らがスポンサーとなり番組を支えようと、1千万円余の寄金が寄せられることになる。

それでも毎日放送は既定方針通り番組を打ち切った。そこで集まった基金の返金手続きがとられる一方で、「お金は返金しないでもいい

から『たね蒔き』の精神を引き継ぐ番組を作ってほしい」という要望が数多く寄せられた。そこで存続運動を担ったメンバーらによって、放送への市民参加を支える一般社団法人「ラジオ・アクセス・フォーラム」が設立され託された866万円を基金化、新番組「ラジオフォーラム」の制作放送が始まっている。いくつかの県域ラジオ局に放送をお願いしてきたが現時点では実現していない。だが全国32のコミュニティ放送局とカナダの日本語ラジオ、そしてインターネット放送で、1月12日より週1回1時間の放送が始まっている。詳しくは<http://www.radio.org>。

ラジオのページ

⑫

ラジオの昭和と

武本 宏一

ラジオの世界から、また一つ、昭和が消えていった。

昨年12月10日に83歳で亡くなった、俳優の小沢昭一さん。

そして、昭和48年から39年11カ月も続けたTBSラジオ番組「小沢昭一の小沢昭一のこころ」である。

情報生ワイド番組一色の今どきのラジオの中で、話芸の真髄を味わえる唯一の番組だった。

昨年暮れの29日には、追悼特集番組「明日のこころ」小沢昭一について考える」が放送された。

60分の中でも庄巻は、何と言っても、話芸の達人小沢の多彩な芸であった。

平均的日本のオトウサンの姿を「宮坂さん」という名のキャラクターに託して語る、その巧みな話術。

そして最も得意とした楽器、ハーモニカによる演奏。特に「丘を越えて」は絶品であった。

オトウサンの「宮坂さん」は、呑み屋では上司の悪口を叩くは、社員旅行先では怪しげな振る舞いに及ぶはと、まさに高度成長期の代表的な昭和男の典型だった。

ハーモニカだって、近頃ではトンと聞かない、昭和の楽器そのものである。

昭和で15年、平成に入ってから24年も続いたこの番組だが、それはまさに昭和を生きた昭和を愛した小沢さんの心意気の反映だった。子供のころ、蒲田の夜店に通い、テキヤを先生として話術を会得したという小沢さん。

早大の「落研」を経て、俳優座では千田是也に学び、次第に「小沢節」を確立していく間にも、テープレコーダーとカメラを持って、全国の放浪芸を蒐集し、自らの芸のコヤシにもした。

番組キャラクターの「宮坂さん」というのは、実は構成担当の宮腰太郎さんと古くから番組をプロデュースしてきた坂本正勝さんの名から一字ずつを取って名づけられたもの。

その坂本さん(筆者のTBS時代からの同僚)がこう述懐する。

「この番組は、昭和48年にスタートした当時のアイディアと構成をずっとそのまま保ってきたのです。」

開始当時TBSラジオのエースの一人だった篠崎利男さんが、小沢さんを発掘、起用し、また数多の作家の中から、バラエティーやホーメドラマの台本で定評のあった「つんべ」こと津瀬宏さんに構成をお願いした。その骨格が最後まで生きていたのです

「それが…」と坂本さんは声をつまらせる。「その篠崎さんは若くして他界し、つんべさんもその後を追うように、料理屋の階段で落事故で亡くなった。

実は、「宮坂さん」の片方の構成作家宮腰さんも、昨年9月に故人になられました」。そして小沢昭一さんなのである。

濃密な人間関係が、涙と笑いを生んでいた、小沢愛する時代、昭和。

追悼番組の中で、小沢昭一さんは唱う。

「しゃぼん玉とんだ。屋根までとんだ。屋根まで飛んで、こわれて消えた」。

昭和というしゃぼん玉、それは筆者にとっても、思いは同じである。

「風、風、吹くな。しゃぼん玉、とばそ」。

「アリス北京公演」衛星生中継

「日中友好の絆は今」

田中 秋夫

1981年の8月19日から1週間、谷村新司氏率いるアリスの中国北京公演を文化放送が衛星生中継する為に、私は10人のスタッフと共に北京に派遣された。

この公演は1972年の日中国交回復10周年を記念して、日本と中国の若者たちが音楽を通じて両国の友好親善を深めようという意

図のもとに、日中友好協会と中華全国青年連合会が主催したもので、日本から「日中若者ハンド・イン・ハンド友好訪中団」の一行287人が同行した。

当時谷村新司氏は文化放送で深夜放送「セイヤング」と全国ネット番組「青春キャンパス」の2本のレギュラー番組を抱える超人気アーティストであった。

8月23日公演当日の北京は快晴だった。会場の北京工人体育館は12000人も収容する大きな会場だったが、人民服の観客で満席となった。その中央には鄧小平副主席の姿もあった。

午後1時30分、開演のベルが鳴り終わると同時に司会者がアリスを紹介すると、会場は割れんばかりの拍手に包まれた。そしてアリスの3人がやや緊張した表情で登場し、演奏を開始した。突如、会場に大音量が溢れ、ロック風の音楽に慣れない中国人の観客はその音と照明のめまぐるしい変化に圧倒されていた。日本語の歌詞は中国語に翻訳され、電光掲示板に次々に表示されていく。そして中国でも大ヒットした「昂」を歌い終わった時、谷村氏が会場の観客に向かって語りかけた。

「今、このコンサートを日本のラジオで聴いている皆さんに向けて大きな拍手を送って下さい」この呼びかけに会場の全員が一斉に熱い拍手が沸き起こった。そして最後の曲「美しき絆」ハンド・イン・ハンド」ではステージ上に共演した中国人歌手も繰り出し、お互いに手をつなぎ合唱になった。「きつと 何時の日か 心が開いてゆくと信じたい ハンド・イン・ハンド」やがて観客席の全員も立

ち上がって手をつなぎ、曲に合わせて口ずさむという場面が生まれ、感動的なフィナーレを迎えた。

帰国後に聴いた話だが、谷村氏はこの北京公演で中国の若者から「日本は何故大陸に背を向けているのか？」と聞かれたという。それ以来、彼は日中交流に精力を注ぎ、中国各地で「友好コンサート」を続ける他、上海音楽学院の教授を手弁当で務める等の活動を行ってきた。

あれから30年以上の月日が過ぎ、「日中国交回復40周年」の記念すべき昨年9月、新たに「尖閣諸島国有化」による領土問題が過熱し、中国各地に反日デモが荒れ狂った。その結果、北京で9月に予定されていた谷村氏のコンサートも延期されたという。彼は記者会見で「文化こそが最後の砦だと思ふ。文化交流は途絶えさせてはいけない。僕は出来ると思ひます。」と語った。谷村氏をはじめ多くの先人たちの「日中友好」の努力は幻に終わるのだろうか？日本にとって中国が「近くて遠い国」から「親しい隣国」になるのは何時なのだろう。

テレビ研究における可能性をさぐる

放送人の証言 研究講座開催

当会が進めている放送現場の「オール・ヒストリー」記録「放送人の証言」が、周辺の研究機関からも注目を浴びていますが、暮れの12月1日(土)、マスコミ学会主催の研究講座が東京・本郷の東大福武ホールの学習

スタジオで開かれました。

昨春当会と講座を共催した、東京大学情報学環やNHK放送研究所も加わり、今回の講座は、当会の桜井均さん(元NHK)による「証言」内容の分析・解説と、東大・石田英敬研究室が取り組む「認知テクノロジー・知の森」(電子万能百科事典)構想説明の2本立てで、いわば「放送文化財の再利用」の可能性を探る事例研究会といえ、集まった50人近い参加者たちが熱心に耳を傾けました。

講座の「柱」となつて興を誘ったのは桜井均さんの報告で、当会の「ドキュメンタリー・ワールド」講座でおなじみのアーカイブ作品分析手法(時系列的に俯瞰し、「樹木図」風に作品を位置づけながら時代や社会への批評性を検証する評価法)を用いて、彼は今回、試しに証言録から先駆的な制作者たちの主張や作品の特徴を抽出してみせました。ピック・アップしたのは、テレビ創業期から初期黄金期(1960〜70年代)の群雄の内、演出の吉田直哉、和田勉、大山勝美、今野勉、横澤彪の各氏と音楽効果の織田晃之祐氏らの事例で、これら先達が編み出した独創的な「テレビ的表現」を、作品のシーンで例証しながら、要領よく指摘したのですが、これが刺激的で興味深く、会場を魅了しました。當時を知らない若い研究者たちの反応も上々、まして老世代の感慨は…の、熱い雰囲気でした。

ラジオの録音構成を下敷きに、「考えるカメラ」で現代を斬り、ドキュメンタリーからドラマへと大胆で斬新な表現を開拓した吉田直哉氏、撮影機器の限界を補うアップ手法の多用で心理表現を強調、一方で「テレビは音

である」と音の効用を重視した和田勉氏、その和田氏はじめ異色の演出家の個性に合わせ自在で独自の音響効果の世界を創った織田晃之祐氏、「日常の中の非日常」「既知を未知にする」と身近事象からの発見に目を凝らした大山勝美氏、「テレビは文学に屈してはならない」の信念でドキュメンタリーとドラマの接点の中に「現在のリアリティー」を追求した今野勉氏、「テレビはパーツに過ぎない」と笑いの本質と奥深さを多彩に表現したバラエティーの横澤彪氏。

ほぼ60分の編集映像と口頭解説とで集約されたテレビ世界の『万華鏡』は、濃密で魅惑に満ち、今更のように独自の「文化」への興奮をかき立てるものがありました。同時にそれは、現在170名に及ぶ「放送人の証言」が「語り部」役となる、テレビ史の「臨場的な肉付け」の大切さを雄弁に示すものであるように思われました。

桜井報告に続いて、「証言」や作品アーカイブをどのように利用できるかの試みの一つとして、東大情報学環と共同研究中の日立ソリューションズ・三分一信之氏から、電子検索システム「知のコンシェルジュ」設計の趣旨と利用法の一部がスクリーン上で紹介されました。討論者として総括した東海大学・加島卓氏（広告史専門）から「放送内容と証言との関わりが、業界外の人にとって理解されるかが肝要」との指摘があり、それを受けて東大の石田教授が、「証言アーカイブスを使って『放送人』という興味深い人々の思考方法を取り出し、テレビ研究に役立ててみたい」

と発言しました。

石田発言は情報学環側の関心の吐露であるとともにテレビの情報発信の核心に触れるもので、桜井報告とも呼応するユニークなテレビ文化論になる可能性を感じました。

筆者の率直な感想を添えれば、証言記録という「宝庫」は先ず放送界で活用すべき貴重な財産で、テレビ放送開始60周年を迎えるこの機に、当会内部でも活発なアイデア論議があつていいように思えます。（鈴木典之 記）

国際シンポジウム 領土をめぐる日中韓摩擦と メディア

昨年11月18日（土）午後1時半〜6時、慶応大学三田キャンパスのグローバルセキュリティー研究所 東館ホールで表題のシンポジウムが開かれました。主催は北海道大学院メディア・コミュニケーション研究所付属東アジアメディア研究センターと慶応大学総合政策学部李洪千研究室、共催が放送人の会と韓国PD連合です。

尖閣列島・魚釣島、竹島・独島と日中、日韓の間に領有権紛争が起こっていますが、このことをそれぞれの国のメディアはどう報じたのか。メディアの果たすべき役割をはたすことができたのかを論じるシンポジウムで、国家権力との関係で非常に難しい問題を論じることになりました。

司会は李洪千慶応大学専任講師、挨拶に今

野勉放送人の会代表幹事。

第一部は「メディアは『領土』をいかに報じたか」と題し、金宰永（韓国MBC）、毛峰（香港亞洲週刊）安江伸夫（テレビ朝日）の3氏からそれぞれ報告があり、渡辺陽介（共同通信）氏がコメント。

第二部は討論で、問題提起が韓東燮（韓国漢陽大学）氏、コメントが金平茂紀（TBS）氏、討論はこの2人に金宰永、藤野彰（北海道大学院）の両氏が加わって行われました。

この会は昨年の韓国・慶州での「日韓中テレビ制作者フォーラム」でのシンポジウムの成果を引き継ぐもので、少なくとも日韓のメディア担当者のあいだでは率直な意見交換ができたと確認できました。

金平氏の「真のジャーナリズムは国境を越える」との発言が印象的でした。

新刊紹介

ネット・モバイル時代の放送

〜その可能性と将来像〜

（編）日本民間放送連盟・研究所

車内で座る乗客のほぼ全員が首をかがめケータイやスマホやタブレット、携帯PCに見入っている光景が当たり前の風俗になった。文庫本やタリ紙を漁り、車外の風景に目をやる（私のような）者もいるにはいるが何となく「昭和葉民」の切ない存在として映る。

放送と通信の融合という言葉が軽やかにとくに深刻に語られ、恣意的なデザインが乱舞して20年ほどたった。

視聴者や制作現場に事業者に放送外他メデ

ィアが参入し、新しい地平で生み出されるメディアの本質とは何かが確実に問われる時代に入った。

本書は放送の将来像と法制度の研究会（民放連主催）が過去2年間にわたる各分野の学者・研究者の検討を経た報告集だが、問題抽出的な分析と示唆的な発想で読ませる。さなきだに《3・11》という未曾有の災禍に遭遇し、かつテレビ60年を迎えた今、メディアの本質を問う熱い書になっている。

前川英樹の適切なナビゲートで全論文の輪郭をまず押さえた上で各論に導入する手引きが明快で便利だ。

その前川が《3・11》に際してJNN系列の深夜オムニバスドキュメンタリー番組「3・11大震災 記者たちの眼差し」にみる一人称目線を基本にしたローカル各局記者による映像記録をベースに分析した記述に注目したい。

被災地のむごすぎる現場を前に記者たちは足がすくむ。現場を取材するルーチンワークが一切壊れる。取材が救助か、その前の現場にたたずむお前は何者なのか。前川自身も現地に赴き二重の形で記者たちの眼差しの在りかを追いもどめる。その結果、近代史の連続性でかこいこむ復興の掛け声とは切れた《3・11》の現実には放送人のおのれのアイデンティティーを試される時代の予感を鋭い指摘が熱く伝わってくる。モザイク風に展望したわけではない書である。

（学分社 2900円）

第36回放送人句会

◇平成25年1月9日(水)

◇於：赤坂・表屋

◇選者：星野高士

◇出席：伊藤規郎、上村晔蛙、鶴橋康夫、豊田まつり、

中島丈博、新村もとを、堀川とんこう、松尾馬笑、森治美、

西川阿舟

◇不在投句：萩野慶人

◇兼題：歌留多、冬牡丹、年男、新年会

【星野高士特選】

新年会夕陽の中の精養軒

眼差しと手と手が絡む歌留多取り

酒やけの顔見交はして新年会

冬牡丹女抱へて帰りけり

年男飲めば本領発揮せり

囀はれて紅き吐息や寒牡丹

年男落ち目隠して音頭取る

見残した夢の続きよ寒ぼたん

【星野高士選】

ネクタイのお見立てどなた新年会

恋すてふ亡母の歌留多十八番札

合コンの仮の姿や歌留多会

終着駅大天狗面冬牡丹

寒牡丹清きを剪れり吾子嫁く日

戦さ終り灯り点けてのかるた会

往きて海貨車轟々と寒牡丹

上の句を思い出せねど歌留多会

年男鳥居くぐるとき背伸びして

稚児の日の夢茫々と歌留多かな

文博

いさましき年男たれ母の念

絨毯に歌留多散らばり孫はしゃぐ

新客に視線集まる歌留多会

初句会終へて新年会となり

簪の時折り触るる歌かるた

冬牡丹競ふがごとく見入る女

冬牡丹買ひて華やき腕の中

聞きほれし声音につまづく歌留多かな

新年会明日は敵でもおめでたう

厚紙がばたばたと鳴る歌留多かな

かるた取る老女の指の白さかな

恋歌に歌留多がにじむことありて

なんかこう沢尻エリカ冬牡丹

振袖の重きが仇の歌留多かな

新年会笑顔に隠す本音あり

新年会泡沫の夢吞みつくし

振袖を手繰りて屈む冬牡丹

たすきして歌留多女王の上気せる

【会員互選】

魚河岸のタオル鉢巻き年男

冬牡丹寄り添ひ愛でる老夫婦

寒牡丹咲かせて女将誇らしげ

新年会酒一合の酔い心地

冬牡丹一隅華やぐ花の店

新年会疑心暗鬼の笑顔かな

年男20の4倍プラス4

おもひそめし我名立ちける歌留多会

冬牡丹いちどがいゝわ菰のなか

女子たちが仕切つてゼミの新年会

剣道の立会ひに似て歌留多会

この茶店抹茶あります寒牡丹

青い空ポーンと浮雲冬牡丹

治美

慶人

晔蛙

阿舟

もとを

治美

とんこう

治美

慶人

まつり

とんこう

治美

康夫

文博

治美

文博

もとを

視郎

年男老いと若きと並びをり

過ぐる日々これが最後と年男

媚むすこ酒量を競ふ新年会

【選者吟】

歌留多とる意中の人と目の合はず

夕鐘に一弁震ふ寒牡丹

歌留多とり止め麻雀となりし夜

星空や新年会の迷ひ路

いつか一人新年会の帰り道

風音の次に聞来る冬牡丹

言の葉が言霊となる年男

次回放送人句会

◇3月13日(水) 18・00頃から19・00投句締切

◇赤坂・表屋 (Fax:03-3586-0056)

◇兼題：木の子時、白子干し、蛙、楽屋

文博

治美

晔蛙

星野 高士



兼題「歌留多」のために会場で配られた紫式部を描いた絵葉書。

第33回：名作の舞台裏

ドラマWOWOWスペシャル

「なぜ君は絶望と闘えたのか」

(2010年9月25、26日放送)

ゲスト 眞島秀和 (主役出演者)

門田隆将 (原作者)

岡野真紀子 (制作)

石橋 冠 (演出)

司会 渡辺敏史 (会員)

12年11月23日・情文ホール

司会 地上波テレビとは一線を画し、中CMも廃し、独自の視野によるドラマ作りで実績を上げていくWOWOWが極めて困難な企画に踏み切った動機からまずお聞きしましょう。



岡野真紀子さん

岡野 係争中でしょうか渦中にある光市母子殺人事件でスポンサーや世論など、ドラマ化の困難さは分かっていたのですが、門田さん(原作者)の本を読んでいくうちに挫折をくりかえし、絶望の淵にさ迷うた一人の被害者遺族、本村洋さんの思いを死刑是非論を越えた人間の姿として見つけたかったです。

司会 ドラマの原作の「なぜ君は絶望と闘えたのか 本村洋の3300日」(新潮文庫)を書かれた門田隆将さんを紹介します。(拍手)



門田隆将さん

門田 ノンフィクションの立場は小説とちがいが、事実以外の思い入れは一切排除します。死刑賛成反対の立場ではなく不条理な雑音の中で妻子を理不尽に殺された衝撃や絶望の淵からどう立ち直って行くか。孤独な闘いを通して人間の救いを記録にしたかった。

司会 ドラマを見た感想は?

門田 試写を見て眞島秀和さんの木村さんなど、まるで本人ではないかと思うほどでした。

司会 一般に虚構を積み重ねて事実迫るのがドラマですが、この場合は白黒をつける法廷ドラマではない。人間の真実の姿を求めるドラマですが…

石橋 依頼されてこれは出来ない、コワイドラマだ。断ろうと思ったが原作を読み直し、岡野君とディスカッションを重ねるうちにこれは人間の再生のドラマだ。従来のドラマ観に挑戦してみよう…



石橋 冠さん

司会 本村さん役の眞島さんです。(拍手)



眞島秀和さん

眞島 僕は木村さんと同世代ですが、俳優の演技じゃなく人間として参加して欲しいという言葉にはげまされ、夢中でやらせていただきました。

—ラストシーンの対話(脚本から)—
江口 君は成長した自分に気づいていないだけだ。

眞島 いや僕は、そんな成長よりごく当たり前の生活をして、笑ったり怒ったり特別なことがおこらず家族と一緒に年を取って行く、そんな人間だったらしいのです。

内容が内容だけに従来の「名作」とは全く異質の雰囲気映像に対峙する観客の姿が印象的だった。(編集部)

放送人の会忘年会

12月15日(土)、幹事会のあと忘年会をテレビマンユニオン隣のビル地下の「アンカフェ」で行いました。幹事でない会員の参加も多数で、楽しい会になりました。



いろはに時代劇とその四

菅野高至

時代劇の言葉を知らないプロデューサーと脚本家の窮地を救ったのは、スタッフのKとYである。Kは金曜時代劇班のデスクで、時代劇と時代小説をこよなく愛して、時代劇の諸事万端に大変詳しくあった。そのKに、どう書けば台詞が時代劇らしくなるのかを相談すると、

「語尾に『……でいやる』と、『いやる』を付けとけば、それらしくなる。あとで見直してから、当座は『ござる』で充分だ」とあつさり言い放つ。

そして、おまけのように呟いた。

「現代語の使用を避けるために、辞書を引く。辞書はこれ」と手元の使い古した小さな辞書を指し示す。

新潮社の「現代語・古語 新潮国語辞典」だった。現代語・古語の両引きが出来て、「古語」は、ひとつひとつの意味に初出文献名が引用付きで載っている。その文献の出版年を見ると、いつ頃から、何処で使われていたのかが分かる。

逆に、初出の文献名が無い言葉は、明治以降、外国語に対応して作られた「現代語」となる。

小さいながらも、引用文が豊富で解説も丁寧なこの辞書を、井上ひさしは「日本語の戸籍の辞典」と称した。ただ読むだけでも、面白くて為になる本である。

その戸籍の辞典を豆に引いて「現代語」を「古語」に言い換えて、敬語・丁寧語を

おろそかにしなければ、時代劇の言葉になる……そう見当をつけた。

だが、私は敬語が大の苦手で、文法はあやふやだった。

「ひ」と「し」の発音がひっくり返る下町では、敬語わけでも謙譲語とは全く無縁の世界で、向島育ちの私は使ったことが無いから、使えなかったのだ。

だが、時代劇では、上下関係を端的に示す謙譲語が欠かせないと知って、参考書を買ってにわか勉強に励むのだが、文法は苦手だという意識があるから、やればやるほど一層分からなくなる。

この時ほど、言葉は育った環境に左右されるものだと、実感したことはない。

そんな私に、なんと救いの神がいた！スタッフのYである。Yはスケジュラーを兼ねる三番手の演出で、東京大学の国文学科卒。まがう方なき国語の専門家だった。彼は、問えば答える、格好の歩く古文の文法書となった。

この二人に出会わなければ、私は時代劇が嫌いになっていたかも知れない……。

さて竹山洋さんである。Kの助言通りに『ござる』を多用して書いたのは最初のうちだけで、習うより慣れよ、次第に、現代語が少し混在する自然体の台詞に落ちついた。

「みそ汁のうまい女は良いのだ」。言い切りの「……のだ」は、竹山さん独特の言葉づかいで、財津一郎さん演ずる現役の町奉行・佐伯熊太に良く似合っていた。汗かきでせつかちの熊太は言い切りがふさわ

しかったのだ。また、軽演劇出身の財津さんが持つ芸風にも良く似合っていた。

ちなみに93年4月、放送時の財津さんは59歳で、清左衛門の仲代さんは60歳の還暦だった。思えば、あの頃は、「還暦」という言葉が輝いていた幸せな時代でもあった。(つづく)

『放送人グランプリ』投票の準備をお願いします。

堀川 とんこう

年1回の『放送人グランプリ』の季節がやってきました。1年が本当に早いです。残りの時間が少ないはずの高齢者にとつて、ますます時間が早く経っていくというのは皮肉なことです。誰もがそうなのでしようか。若い時と変わらないうち、という人もいらつしやるのですかね。毎日会社に行く、というような日課、日々の拘束があるほうが時間の流れを細かく意識して過ごすことになり、その方が1か月、1年を長く感じるのかもしれない。

高齢者のスケジュールは飛び飛びです。週に一、二回、観劇だったり病院だったり予定が入ります。するとその一、二回の予定を間違ひなくこなすために、注意深くその日を待つて過ごします。すると1週間はその2日だけが意識され、他の日はまったくなかったように過ぎ去るのかもしれない。時間の流れを遅くするには自分

日課を課すこと、というのが私の仮説ですがいかがでしょう。

以上『放送人グランプリ』とはまったく関係のない無駄話ですが、3月末の締切でまた推薦作品の投票をお願いすることになります。どうぞよろしく願います。因みに昨年度の芸術祭の受賞作品を記しておきます。

テレビドラマ部門

優秀賞

NHK「土曜ドラマ『とんび』前後編」
フジテレビ「遅咲きのヒマワリ〜ボクの人生リニューアル」
WOWOW「尾根のかたに〜父と息子の日航機墜落事故」

ドキュメンタリー部門

大賞 Nスベ「メルトダウン 連鎖の真相」
優秀賞 ABCドキュ・スベ「復興の狭間で〜神戸 まちづくりの教訓」
Nスベ「終戦 なぜ早くきめられなかったのか」

山口放送「笑って泣いて寄り添って」

ラジオ部門

大賞 東海ラジオ「よみがえる話芸 節談説教」
優秀賞 NHKFM「ヘブンズコール」(ドラマ)

青森放送 「金正美の青春 詩人桜井哲夫との17年」
北海道放送 「凍えた部屋〜姉妹の『孤独死』が問うもの」

【あ】青木裕子 赤井朱美 秋田完 秋山豊寛 雨宮望 新井和子 【い】池田正之 石井彰 石井ふく子 石高健次 石橋冠
磯野恭子 磯村健二 市岡康子 市村元 一色伸夫 伊藤雅浩 井上良介 今井義典 岩澤敏 【う】上村忠 碓井広義 臼杵敬子
歌田勝彦 宇野昭 【え】江口展之 遠藤利男 遠藤ふき子 遠藤雅充 【お】大蔵雄之助 太田敬雄 太田昌宏 大西康司
大西文一郎 大原れいこ 大山勝美 大類啓 大脇明 岡弘道 岡田晋吉 緒方陽一 岡村黎明 小河原正巳 沖野暲 荻野慶人
小田久栄門 織田晃之祐 【か】加賀美幸子 各務孝 片岡敬司 勝部領樹 葛城哲郎 加藤滋紀 加藤迪 加藤義人 金沢敏子
金子登起世 兼歳正英 金平茂紀 加納孝夫 鎌内啓子 上安平冽子 鴨下信一 川口健一 川口幹夫 河村正一 【き】岸田功
北川泰三 北川信 北出晃 北村美憲 北村充史 木村成忠 【く】楠美昌 工藤英博 久保志穂 隈部紀生 【こ】小池勝次郎
河野尚行 児玉久男 後藤和晃 小南武朗 近藤晋 今野勉 【さ】斉藤伸久 斉藤秀夫 斎明寺以玖子 酒井美樹男 寒河江正
坂元良江 桜井均 佐々木彰 佐々木欽三 佐藤年 澤田隆治 沢田隆三 【し】重延浩 重村一 静永純一 志津木敬 嶋田親一 清水
満 下崎寛 下重暁子 白井博 【す】菅野高至 杉澤陽太郎 杉田成道 鈴木嘉一 鈴木昭典 鈴木典之 鈴木道明 須磨章
【せ】せんぼんよしこ 【そ】曾根英二 【た】高島秀之 武本宏一 田澤正稔 田中昭男 田中秋夫 田中直人 田中則広
田原英二 田原茂行 【つ】辻本昌平 露木茂 鶴橋康夫 【と】土居原作郎 堂本暁子 戸田佳太 外崎宏司 豊田由紀子
豊原隆太郎 【な】中崎清栄 中島僚 中田美知子 永田浩三 長沼士朗 永野敏一 中村敦夫 中村克史 中村季恵 中村耕治
中村敏夫 中村英美子 中山和記 難波秀哉 【に】新村もとを 西ヶ谷秀夫 西川章 二宮文彦 丹羽美之 【の】信井文夫 【は】
橋本潔 林健嗣 林裕史 原由美子 原田令嗣 【ふ】深町幸男 藤井チズ子 藤田晋也 藤久ミネ 【ほ】星田良子
堀川とんこう 【ま】前川英樹 松尾羊一 松平定知 松前洋一 松本修 黛りんたろう 【み】三上義智 水上毅 水野憲一
三原治 三村景一 三村千鶴 宮川鑑一 三宅恭次 明神正 【む】村上光一 村上雅通 村上佑二 村田亨 【も】諸橋毅一 【や】
八木康夫 矢島良彰 藪内広之 山県昭彦 山崎隆保 山崎裕 山路家子 山田尚 山田良明 山根基世 【よ】横山英治
吉澤保 吉永春子 吉村直樹 【わ】渡辺紘史

編集後記

▼新春号でたくさんのかたに寄稿いただきました。まことにありがたうございます。何でも自由にお書きくださいとお願いましたので、バラエティーに富む内容になったと喜んでいました。▼連載をお願いしてきた武本さんのラジオについてのエッセイはご本人からのお申し出で、今回で最終回です。もう少し続けていただきたのですが▼記事の中に掲載できなかった本の表紙をここで2つ紹介します。1冊目は、大山勝美さん、寒河江正さんが書いておられるもので「あのときぼくらは13歳だった」(東京書籍・1600円)で、2冊目は14ページの本の紹介欄の「ネットモバイル時代の放送」です。



▼例年、新春号にいただいた年賀状のコピーをいくつか掲載していますが、今回は編集長が賀状に使った絵を右に掲載します。昨年「日韓中フォーラム」の韓国・慶州、ミレニアムパークでみた12支神将の石像の中の1体です▼締切を過ぎ編集がほぼ終わった段階で原稿が3本来てあわてて組み直しましたが、少しごたごたしているかと思えます。ごめんなさい▼この号は法人化のための臨時総会の前の発行です。正式に法人になるのは手続きがすむもう少し先になりますが、なったら題字などそれに合わせたものになります。(視郎)

▼83歳の春、よくぞ生きにけり、と我が身を言祝ぎていたおり突然、天罰がくだった。便器にほとばしる鮮血!血尿だ。慌てふためき診療所を経て泌尿器科専門病院へ。モニターに映る血線が泳ぐ膀胱内。こりや大病院収監かなあ。「悪性かどうが2週間後に分かります」と医師は続けて酒はダメ、煙草も減らせ、ときた。わかっちゃいるけど、フグは食いたし、命は惜しい、が人情だ。

丁半のいのち遊びや暮椿 馬笑

そんなわけで正月早々、こしかた行く末がちらつく今日この頃。しばらくは浮世の義理を欠くやも知れません。

皆様も折角ご自愛ください。(M)

